

2015年10月11日 主日礼拝メッセージ

聖書：第一ヨハネ1章1～10節

説教：いのちのことばについて

1 「光の中を歩む」

1) 神は光であるから

今週からしばらくヨハネの手紙第一を見てください。

この手紙を書いたヨハネは、2節で「このいのちが現れ、私たちはそれを見た」あるいは3節で「聞いた」とも語り、実際にイエス・キリストに間近に接していたと考えられています。そのヨハネは、キリストから聞いたこととして5節で、「神は光であって、神のうちには暗いところが少しもない」と証言します。暗やみは罪と言い換えることもできます。では、暗いところがない、すなわち罪のないところとはどのようなところでしょうか。私たちは罪を背負って生まれ、ずっと罪の世界で生活してきました。罪がまるで皮膚のようにべったりと自分自身に張り付いています。そんな私たちが、いきなり罪のない世界を想像して下さいと言われても、ととまどいます。

2) どのようにしたら光の中を歩むことができるのか

主に会おう前、わたしは暗やみが自分の中にあるとは知りませんでした。目に見える世界がすべてで、罪のない世界など考えたこともない。でも、何かの機会に居心地を悪くさせるようなものが心の中から湧いてくるといった感覚を覚えることがありました。今から思えばそれは罪というものであることが分かります。しかしそのときは、そういうことも知りませんから、どう扱ったらよいかわ

かりません。いつもいらいらしていました。どうせほかの人も同じようなことをしたり考えたりしているのだから、自分はそのほど悪い者ではないと言い聞かせて誤魔化していました。そのようにして暗やみを歩んでいました。

暗やみを歩んでいる者は、光を知りません。ですから自分が暗やみの中にいるという自覚がありません。光を見たことがない人には、暗やみの世界があたりまえなのです。しかし私たちが光である方を知らされたとき、初めて自分が暗やみを歩んでいた者であるということに気がつきました。7節に「もし神が光の中におられるように、私たちも光の中を歩んでいるなら」とあります。光である方を知ったときから、7節にあるように私たちも神のように光の中を歩むべきであると教えられました。

問題はここです。いったいどのようにしたら光の中を歩むことができるのか。いつものパターンですが、頭ではわかっている、それができない。これが多くの方の悩みとなっています。光の中を歩んでいない自分は、罪からきよめられないのだろうか。そんな深刻な悩みさえ聞こえてきそうです。

そんな方々のために7節の意味をもう少し掘り下げてまいります。

2 7節の意味

1) 前半部分「これから歩もうとしていくなから」

7節は「もしなになにならば、こうです」

という文章になっています。これ前半と後半に分けて考えます。「もし神が光の中におられるように、私たちも光の中を歩んでいるなら、」これが前半部分。「私たちは互いに交わりを保ち、御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。」これが後半部分です。

まず前半を見ます。日本語聖書では、「もし私たちも光の中を歩んでいるなら」となっていて、英語聖書を見てもあたかも今現在私たちがすでに光の中を歩んでいることが大前提であるかのような訳し方をしています。しかしこれは原文のニュアンスが正しく伝わりにくいように思います。原文を直訳するとこうなります。「神が光の中におられるように、もしこれから私たちも光の中を歩もうとしていくな。」実際に聖書が言っているのは、私たちが今光の中を歩んでいるかどうかではなくて、これから私たちが光の中を歩もうとしているのかどうかだと言っているのです。

皆さんは7節を読んでどう思ったでしょうか。私自身のことをふり返っても、光の中を歩んでいるという実感があまりありません。もちろん時には光の中に置かれていると感謝することもしどきあります。けれども光の中を歩んでいるとは到底言えない、そう感じるの方がどうしても多い。もしそうであるなら、7節の後半部分はどうなるか。自分はこれに該当しないことになる。すべての罪からきよめてくださる御子イエスの血は私には注がれていない。そういうことになってしまいます。それはおかしい。大事な事なのでもう一度言います。ここは、すでに歩んでいるかどうかではなくて、これから歩もうとしているかどうか、それが前提になっ

ています。

2)御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます

いま7節の前提部分を確認しました。では7節の後半はどうなるのか。そのことを次に見ていきます。

皆さんはここを読んでこんなふうに解釈したのではないですか。「これから私たちが光の中を歩もうと決断し、実際に光の中を歩むことができたなら、そのとき初めて御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめてくださる。きよめてくださるかどうか、それは私たちが光の中を歩むと決断したときに決まる。つまり私たちの心がけにかかっている。」

私たちは生まれてから今日まで一つの常識の中で生きてきました。例えば、宿題をきちんとやったらおいしいおやつがいただける。きちんと働いたら給料をいただく。やるべきことをやりもしないで、報酬だけをもらうということはありません。それがこの世の常識です。

ですからここもそう読む訳です。「きちんと守るべきことを守ったときに、そのご褒美として神さまから恵みをいただく。」さて、この解釈を聞いて悩みは解決しましたか？光の中を歩むかどうかは、私たちの努力に関わることになります。そもそも、それができなくて困っていたのです。

聖書は何と書いてあるのでしょうか。聖書を読むときは常識を捨ててください。7節の前半は、これから先私たちが光の中を歩もうとするのかどうか、未来の話でした。当然7節の後半も未来の話と予想するのですが、そうではない。光の中を歩んでいるかどうかそ

れとは関係なく、もうすでに与えられているというのです。まだ私たちは光の中を歩んでいないのに、すべての罪から私たちをきよめてくださる御子イエスの血はすでに与えられている。

整理します。7節を私なりに解釈するようになります。「私たちはすでに御子イエスの血によってすべての罪からきよめられているので、神が光の中におられるとおりに、私たちもやがて光の中を歩むようになります。」

光の中を歩まなければならないと、肩に力を入れてがんばる話ではありません。すでに神の恵みをいただいているので、自然に気がつかないうちに光の中を歩むようになっていく。そう言っているのです。あまりにも自然に行われるので、自分が光の中を歩んでいる自覚があまりないかもしれません。でも着実にそのように変えられていきます。

3 「光の中を歩む」とは

1) 「罪はない」と言うなら

自然に変わっていくと言っても、「光の中を歩もうとする」とはどんなことかは確認しておいたほうがよいでしょう。ここも私たちの常識が頭をもたげてきます。「光の中を歩むというのは、神に喜ばれる良い人になることです。」もしそのように言う方がおられるなら、逆に質問したくなります。「ではあなたは良い人になれますか。」といったいどう答えるのでしょうか。「努力すればよい人になれるはずだ」答えますか。

でも8節にこうあります。「もし、罪がないと言うなら、私たちは自分を欺いており、真理は私たちのうちにはありません。」

いったいどのような者を神は喜ばれると

いうのでしょうか。「私は罪を犯しませんでした。私は良い人です」と言う者ですか。「私はきょう神さまの教えをきちんと守りました」と言う者ですか。もしそうであるなら、その方は自分に嘘をついていることとなります。神を偽り者としていることとなります。嘘をつく者のうちには真理はありません。真理がないのですから、神が喜ぶはずはありません。

2) 自分の罪を言い表す

ではどのような者を神は喜んでくださるのか。9節。「もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。」どのようにしたら光の中を歩むことができるのか。それが私たちの中を歩むことができるのか。それが私たちの切実な疑問でした。ここに答えがあります。自分には罪はないと言うのではなく、自分こそ罪人であると告白していく。それが光のなかを歩む出発点になる。

よく考えると矛盾するような話です。光の中を歩むには暗いところ、つまり罪があってはならないはずです。ですから光の中を歩もうとする者が罪の告白をすることは、私は光の中を歩む資格がないということになるはずです。そのまま何も起こらなければそのとおりです。しかしヨハネはなんとやっているか。「神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。」私たちが罪の告白をするとき、神は私たちをきよめてくださる。きよめられたのですから、その瞬間、その人は光の中に置かれていることとなります。そのようにして光の中を歩んでいきます。

今年度の標語にこの四月からアモス書 5

章 24 節を掲げております。「公義を水のように、正義をいつも水の流れる川のように、流れさせよ。」私たちのうちには公義も正義もありません。あるのはただ罪ばかりです。しかし私たちが罪を告白するとき、神はそれをきよめてくださり、真理としてくださり、まるで水が流れるかのように、流れさせてくださいます。私の中には光がないと悲しんでいる方。私の中には正義がないと苦しんでいる方。私の中には罪しかないと悩む方。主はそのような方のすぐそばにおられます。私たちを責めるためにおられるのではない。私たちの苦しみ悲しみ悩みを聞きたいと耳を傾けておられます。あなたが罪からきよめられるために、あなたのためにわたしは血を流す。このように語って下さる主は、死という暗やみに下り、そこからよみがえって下さり、いま私たちに光の中を歩みなさいと招いてくださいます。